



巻頭言

誰かの為に戦う強さ

塾長 釜中 明

大震災の影響で東京からモスクワへ開催地が変更されたフィギアスケート世界選手権で、安藤美姫選手が逆転優勝しました。表彰式で日の丸が揚がり君が代を歌う彼女の眼には、光るものがあり神々しく見えたのです。インタビューで「日本のため、被災地のために滑りました。一人でも多くの方に笑顔になって欲しかったから」と語りました。こんな時にスケートをしていていいのだろうかと思っていた時に「笑顔が見たい」という被災者からメッセージの後押しがあったそうです。

仙台でプロ野球の楽天が田中将大投手の力投で地元の初戦で勝利しました。試合後、嶋基宏選手会長はファンに「何のために僕たちは戦うのか、はっきりしました。この1ヶ月半で分かった事があります。それは、誰かのために戦う人間は強いということです」と叫びました。安藤選手の優勝はまさに嶋選手の言葉を実証したのです。

私は「誰かのために戦う人間は強い」という崇高な言葉に感動しました。さわやかなスポーツの世界だけではなく、国難ともいえるこの時に誰もが「誰かのために戦う」という気持ちを持つことが大事だと気づかされました。

《想定外の遇》

東京電力の清水社長が、佐藤福島県知事に謝罪に訪問した時のTVニュースに啞然としました。「この原発事故は想定外の地震と津波によりおこりました」と言ったのです。これでは謝罪ではなく言い訳にただけです。トップが「想定外」という言葉を使うのはタブーです。なにより、明治29年に20mを超える三陸大津波で2万7千人の犠牲者を出しているのです。歴史は繰り返します。「賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶ」この格言を清水社長は知るべきです。何より、原発を造る時に国民や福島県に「安全です」と約束した筈です。それを想定外の事故でした、とは知事でもなくても怒ります。この原発事故はまさに人災です。

《オール電化の罪》

さらに言えば、電力会社の余にも傲慢な企業体質に以前から失望していました。その一つは「オール電化」です。各家庭のエネルギーを全て電気で、という戦略です。塾生からオール電化について聞かれたらNOと答えてきました。まず、停電しないという保証はありません。電気とガスの二つのエネルギーがライフラインに不可欠だと考えているからです。また、電磁波は人体への負荷が大きいのに、説明責任を全く果たしてい

ません。改善の努力が見られない上に、IHクッキングヒーターなど次々と被害の大きな商品を投入しているのです。何より「火」を排除する事の大罪をずっと指摘してきました。人間は「火」を発明して動物からヒトに進化したのです。現に火を使える動物は存在しません。火から蒸気を発明し、さらに電気も発明して文明は進化してきました。今、火を使えない子供が増えていることで、大きな事故が発生するという由々しき現象が進行しています。人類の文明の退化が始まっています。生活の中に火がどれほど重要なのか認識すべきです。

先日、講座の一環で服部緑地にある「日本民家集落博物館」を見学しました。江戸時代の民家12棟を全国から移築展示しています。日本古来の伝統工法と自然と共生する生き方を学びました。土間にはかまどがあり、家の中心に囲炉裏がありました。火を囲んでの団欒が、家族の絆を紡ぎ日本人の優しい心を育んできました。この様に温かな火は、生活の中で常に大きな役割を担っていたことを忘れてほしくないのです。



【飛騨白川郷の民家の囲炉裏】

《いい家塾の戦い》

家を買って後悔する人を無くしたいと思い、当塾を創設して8年が経過しました。良品と悪品を峻別できる、賢明な消費者の輩出が解決策と考え、最新の情報と最適な知識を提供する講座を開催して参りましたが未だ卒業生は500名です。津々浦々に届けたいと昨年著書を出版しました。各地から嬉しい便りを頂いています。欠陥住宅や短命住宅、シックハウス等問題は増加の一途です。良い住環境創出のため、行政や住宅産業界とは長い戦いになりそうです。

第14期の講座が2月から始まりました。

昨年から半年5回の講義を1年通しての10回の講義となりました。従来にはなかった仕上げ材料や保険の話など、家づくりをめぐる数多くの情報を皆さんに伝える事ができればと思っています。毎年講義内容を検討するサポーター会議では、こんなことも伝えたい、あんなことも伝えたいと、様々な意見がでます。つくづく家づくりにはいろんな知識が必要なのだなあと実感します。

<常識の危うさ>

しかしながら、多くの人はそのような勉強をしないまま、自分の経験と感覚だけで家づくり(家選び)をしています。経験については、その人の人生経験そのものですから、例えば合成化学物質は少ない方が良いとか、冬に寒くない家になりたいとか、という素直な意見がでてきます。ただそのような希望を実現させる方法は知らない訳で、どこからか、世の中の常識という枠で考えてしまうこととなります。そうすると、壁はビニールクロスでいいんじゃないか、とか、断熱もそこそこ平均的なもので良いのではないか、とか、常識的な所に落ち着いてしまう事も多いようです。

ところが、そのような常識が「心地よすまい」を実現する条件に一致していれば良いのですが、往々にして、それらの常識は「造る側」のことを考えて選択されたものでしかありません。ビニールクロスの方が安く見栄えが良く(できたばかりの時は)クレームも少ないという訳です。「造る側」は、自分たちが造った家に住む訳ではないですから、安く見栄えが良いもので十分なのかも知れません。

<家は、つくるもの>

いい家塾の講義は、家づくりで必要な情報の中から、これだけは知っておいて欲しいというものを選びすぐった内容となっています。ぜひ、全講義を受講していただき、皆さんには「家を選ぶ」のではなく、「家をつくる」ことができるようになって欲しいと思います。



【14期 講座風景】

春爛漫の日、いい家塾のお誘いで、日本民家集落博物館を訪れました。この地を訪れたのはおそらく小学校の遠足以来だと思います。その時の記憶では、大きな木の家を見たという以外、殆ど覚えていませんでした。

見学では、特に飛騨白川の合掌造茅葺(がっしょうづくりかやぶき)民家、摂津能勢の入母屋造(いりもやぶくり)茅葺民家、大和十津川の切妻ソギ葺民家、日向椎葉の竿家造(さおやぶくり)民家など庄屋の家々で、大変見ごたえのあるものばかり。ガイドの方が、建築構造だけでなく、なぜそのような室らいになっているのか、当時の家族の生活文化や風習から読み解いていただいたのが大変印象に残りました。

特に驚いたのは、白川郷の家と暮らし。江戸時代の徳川幕府の規制で、石高20石以下の家は分家が認められませんでした。そのため次男、三男は分家による結婚はできません。が、通い婚は認められており、そこでできた子どもは通い婚の妻側の家がすべて養うというもので、総勢30人ぐらいが住める大家族型の家となっているということでした。その他にも、山の斜面に建ち開放部が片側しかない家や、お神楽を舞うための構造を持つ家など、地域の風土や文化、自然環境に適った木の住まいを実感することができました。

多くの民家が当日囲炉裏で火を焚いていたのも印象的でした。煙で燻すことで家を長持ちさせるとお聞きし、建築後数百年が経っているにも関わらず、木の住まいが今でも生きていることも納得しました。

現代の日本の住まいは、木造住宅だけでなく、鉄筋コンクリート造やプレハブ造など、多様化していますが、在来の工法である木造についての知識と経験を、私も含め多くの日本人が見過ぎてきたのかもしれない。紙と木だけでできた家。それが日本の民家の特徴ですが、木を育てる山々の存在や植林の技、木を切り運び製材乾燥する技、地域の生活文化に適った家を建てる技、長く住み続ける技など、多くの先人が知恵を出し文化の結晶のような木の住まいを、私たちは後世にしっかりと伝えていく使命みたいなものを感じた1日でした(私の家も在来工法です)。

これからの住まいを考える良いきっかけを与えていただいたことに感謝します。



【古民家前で集合写真】

よみうり文化センター主催・いい家塾後援のセミナー「精華小学校舎 名建築と郷愁」に参加してきました。

戎橋商店街に正門を持つこの小学校跡は明治6年開校、その後昭和4年に地域の商店主らの寄付金によって鉄筋コンクリート造に建替えられたそうです。地上4階地下1階建。全館暖房を完備しさらに20人乗りのエレベーターが2基設置など戦前の教育環境としてはこれ以上のものは無かったであろうことは十分推察できます。その建築総額は当時の金額でおよそ60万円。これは同じく市民の募金で昭和6年に再建された大阪城天守閣が50万円足らずであったことからみても、まさに大大阪。あきんどの心意気に感服します。

その後、歓楽街であるミナミから子供たちの姿は消えていき平成7年に閉校しました。本年まで生涯学習の場などとして活用されてきましたが今年3月末を以てその役目も終わりました。今後は当時とは逆に大阪市の財政難により売却されることとなります。

財政難の為、売却されたり使い勝手により解体されたりするのはビジネスとしては仕方ないことかもしれません。しかし精華小学校のような公共の近代建築はこれでよいのでしょうか。議員達だけで無く現在の大阪市民は当時の市民の熱い思いによって出来た、近代建築に目を向ける文化的余裕はもう無いのかもしれません。

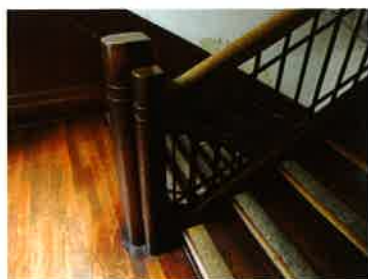
セミナーを終え、精華小学校の正門を一步出ると一昨年閉館となった旧新歌舞伎座の建物が正面に見えます。以前は圧倒的存在感をみせていましたが意外と新しく戦後の昭和33年竣工。精華小学校と同じ鉄筋コンクリート造なのですがたったの50年で建物の老朽化により解体を待つ身に。今に残る昭和初期、大大阪と呼ばれた時代の近代建築を有効に活用、維持していける風土を築けたらと切に願います。



【外観】



【釜中明の講演「名建築と郷愁」】



【理想的な木の床と階段と手すり】

4月12日、水谷ペイント(株)本社工場を「いい家塾」の関係者17名で訪問しました。ご縁は、昨年当塾が受注したN分譲マンションの大規模改修コンサルティングでした。その外壁塗装工事で採用した塗料が水谷ペイント社製の「ナノコンポジットW」でした。ナノテクノロジーを用い環境対応と機能性を両立させた画期的な壁用塗料で、特許取得の優れたものでした。

昨年末、産官学共同で開発した「バイオマスR」という屋根用塗料の完成発表会にお招き頂きました。文字通り原材料は「植物由来の資源」という画期的な塗料です。殆どの塗料が石油化学製品から来ています。石油由来は、人体に大きな負荷をかけるVOC(揮発性有機化合物)を発生させます。これがシックハウスの原因物質であり、シックハウス症候群や70万人以上といわれる化学物質過敏症で苦しめているは周知の通りです。アスベストも遅まきながらようやく退場処分になりました。命と健康をけずる物が淘汰されるのは明白です。

私はこの画期的な商品の製造現場を見たい、そしてこれを作る人たちに会いたいと思い立ち仲間と訪問したのです。第1部は工場見学とプレゼンテーションです。場内は、塗料メーカー独特の刺激臭を予想していたのですがほとんど感じませんでした。周辺住民から臭わない工場だと喜んでもらっているそうです。来年創業90年を迎える水谷ペイントは、創業者以来、塗料製造一筋に取り組んでこられたそうです。特に先進のテクノロジーを導入して、革新的な商品開発に特化してこられたとお見受けしました。長寿の秘訣はこのへんにもありそうです。

2部は両者のトークセッションを、私のコーディネートで進行了ました。水谷社長初め10名の幹部社員が対応してくださいました。ここでは、シックハウスの事例やシックハウス症候群の苦しみなどを問題提起しました。私は「子供受難時代」だと指摘して、13万人の不登校の児童生徒の多くがシックハウスやシックスクールが原因で、学校へ行きたくても行けない現実を訴えました。

人間の心身に大きなダメージを与える商品を排出することは許されません。植物由来の塗料の開発に成功した水谷ペイントさんは正義の味方です。久しぶりに本物に会えた気分になり充実感に浸りました。「大阪に水谷ペイントという小さな巨人が存在した」帰路、神崎川に咲く満開の桜が「花笑み」でした。



【トークセッションを終え、水谷社長と】

伐採祈願祭に行ってきました！ 事務局 釜中 悠至

平成23年3月19日、20日、高知県梼原町へ伐採祈願祭に行ってきました。いい家塾ではもはや恒例となっていますが、いつ行ってもお施主さんはとても喜んでくださいます。今回は3家族の家を支える木を伐採してきました。行程は、朝大阪を出発、バスで愛媛県との県境にある山深い梼原町へと向かいます。梼原町森林組合は、FSCなどの取り組みや、日本の山の現状などを聞かせてもらいます。その後実際に山に入り、伐採祈願の神事を執り行ったあとに斧を入れるのですが60年も生きた木が倒れる瞬間は感慨深いものがあります。夜は懇親会を兼ねて農家民宿で郷土料理をいただきました。心づくしの手料理とおもてなしは、懐かしく、温かいものを感じます。今回は農家民宿のご主人のご好意で代々傳承されている「津野山神楽」も見せていただきました。2日目は四国カルストや、木造庁舎や木橋、電線を地中化して景観美化につとめるメインストリートなど、都市ではお目にかかれない風景に出会いました。



【お施主さんの斧入れ。お孫さんと】

そもそもなぜこのようなことをするのかと言いますと、ひとえに家に愛着をもってほしいからなのです。もちろん伐採祈願祭をしなくても家に愛着をもっている方はいらっしゃると思います。ですが、自分の家を支える木がどのような山で育って、どんな人が管理をし、木の持ち主はどんな人なのかを知るといのは代え難い貴重な経験だと思います。

建築されたあと、何十年と住むお施主さんと、家を引き継ぐ子供やその家族と一緒に山に挨拶し、命をわけてもらうことから家造りは始まるものだと感じています。建築士さんの設計や、大工さんの技術が優れているのは大前提で、長期間家を維持するために大事なことは、どのように住むかにあると思います。家のことを良く知り、大事に住みつなぐためのお手伝いをこれからも続けていきます。最後に、案内をしてくださった梼原の皆さんありがとうございます。

構造見学会とハイキングのご案内

サポーター アトリエ2馬力 吉田公彦

昨年7月刊行の釜中塾長の著書、『いい家づくりの教科書』。この本を読まれ、感銘を受けられた読者の第一番邸が、今回の構造見学会をご案内する家です。子供さんが独立し、これから2人でゆったりと暮らす『終の棲家』を小ぢんまりした平屋で実現したいという熟年ご夫婦のIさん。要求はシンプルですが実は贅沢な平屋。これは齢を重ねても階段に頼らずに、永く住み続けたいという願望の顕れです。そうして計画したのが片流れ屋根を組み合わせた、変形切妻屋根の家です。延床は22坪。お孫さんたちが泊まることを想定したロフトを加えても26坪のコンパクトな中に勾配天井のリビングルーム、主寝室となる和室や水廻りをまとめました。

『ひとつ山の木で家一軒を作る』という家塾推奨の考え方がこの家にも生きていて、すべての構造材が高知県梼原町産の木材です。施主のIさんはお孫さんと共に3月のバスツアーに参加され、伐採祈願祭を行いました。その時の杉の木は家の中心に、まさに大黒柱として7寸角(21cm角)の堂々とした存在感を示します。

小ぶりな家ではありますが、大黒柱や登り梁などもあり力強さ、木の構造体の良さを十分に感じることができると思います。また、断熱材セルローズファイバーの吹込みの実演も予定しています。歴史あるまちなみと新緑の山を満喫できるという『おまけ』付き！ぜひご参加下さい！

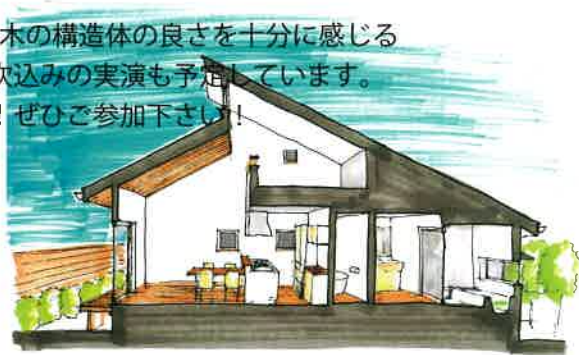
【詳細】

日時：平成23年6月12日(日) 13:30~15:30

集合：近鉄奈良線 瓢箪山駅 改札口

参加費：1000円(資料代として)

申し込み、問い合わせは いい家塾 事務局まで。



編集後記

まずは東日本大震災で被災された皆様に心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。普段おだやかな大地が揺れ、海が荒れ狂うさまを見て人智の及ばないものを感じた。先日、東大阪にある司馬遼太郎記念館を訪れた。そこで感動を覚えた本に出会ったので紹介したい。「21世紀に生きる君たちへ」という書である。氏が晩年、子ども向けに執筆された文章であるが、そこには洗練された真っすぐな想いが詰まっていた。数万人という死者をだした今回の災害を見たら司馬さんは何を思い、どういう行動をとるのだろうか。私たちは21世紀を生きる人間として胸を張れるだろうか。【編集人】

NPO：後悔しない家造りネットワーク《いい家塾》

発行人：釜中 明 編集人：釜中 悠至

本部・事務局：大阪市天王寺区生玉寺町1-13-6F Tel：06(6773)3423 Fax：06(6773)3420

URL：http://e-iejuku.jp E-mail：info@e-iejuku.jp